

ハウスモモ平棚仕立て樹の適正着果数

農業研究センター 果樹研究所 落葉果樹部

担当者：岡田眞治

研究のねらい

モモの平棚栽培での適正着果数については、全国的にもまだ検討された経緯がない。そこで、ハウス栽培のH字形整枝並びに改良H字形整枝の樹を用いて、この適正着果数について検討した。

研究の成果

- 1 早生種の「加納岩白桃」および晩生種の「ゆうぞら」を供試して、樹冠1㎡当たり着果数と樹の平均果重との関係を見たところ、いずれも1%水準で有意な負の相関関係が認められた。
- 2 その回帰式を用いて、早生種では1kg化粧箱詰め6~6A玉中心の階級でかつ10a当たり収量2.0~2.5t、晩生種では5~6玉中心の階級でかつ収量2.5tを満たす着果数を求めたところ、樹冠1㎡当たり11~17果の範囲内にあることが解った。
- 3 早生・中晩生種とも、収量は少し減らしても大玉生産を目標とする場合は樹冠1㎡当たり11~13果が適当で、果実の階級は少し下げても収量増加を目標とする場合は樹冠1㎡当たり15~17果が適当と考えられた。
- 4 樹冠1㎡当たり10果以下の着果数では、収量が落ちるとともに、樹勢が強くなり核割れや生理落果を助長した。

普及上の留意点

- 1 「さおとめ」などのような小玉の品種では、目標とする階級を1階級下げる必要があるため、最高20果程度までの着果は可能と考えられる。
- 2 今回得られた適正着果数は、露地モモでも応用できると考えられるため、近年植栽面積が増加してきた中晩生モモの平棚仕立て栽培への適用も今後検討していく必要がある。

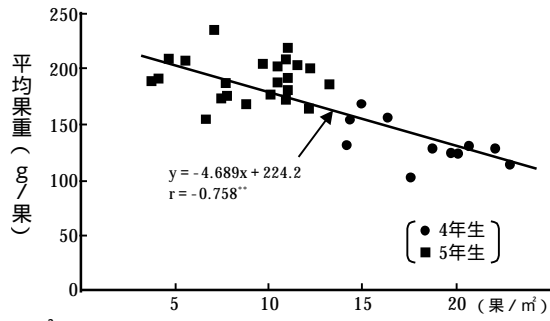


図1 1 m²当たり着果数と平均果重との関係 (4・5年生「加納岩白桃」)

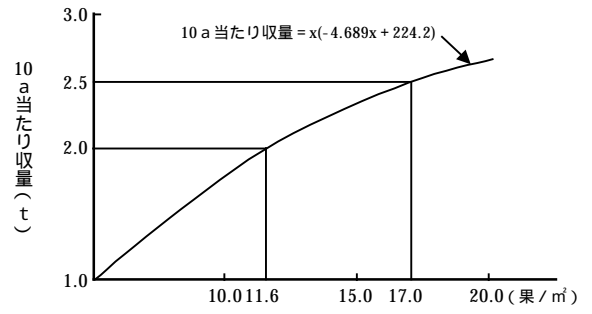


図2 「加納岩白桃」における1 m²当たり着果数と10a 当たり収量との関係

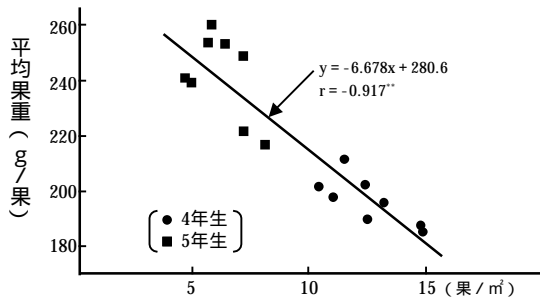


図3 1 m²当たり着果数と平均果重との関係 (4・5年生「ゆうぞら」)

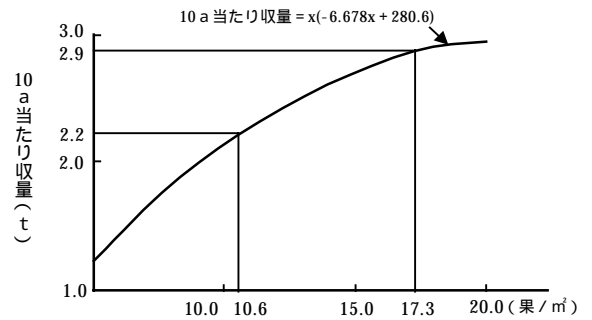


図4 「ゆうぞら」における1 m²当たり着果数と10a 当たり収量との関係



写真1 「加納岩白桃」の適正着果状況